

CD「誰も寝てはならぬ / 米澤 傑 テノール・オペラアリア集」に至る道

私は、CD「誰も寝てはならぬ / 米澤 傑 テノール・オペラアリア集」を発行する前に、1993年には、幾つかの演奏会での私の歌の録音を集めたCD「米澤傑 テノールコンサート」(収録曲の多くのピアノを、妻の米澤悦子が担当しています)を、2002年には、みやまコンセールでのリサイタル(ピアノ:久邇之宣)と、日本・ルーマニア国交100周年記念コンサート(指揮:尾崎晋也 / ルーマニア国立トゥルグ・ムレシュ交響楽団)で歌いました録音を収録しました「米澤 傑 テノールの魅力」という自費出版の2つのCDをリリースしています。そのうち、私の声楽活動の集大成として、フルオーケストラとの共演での「オペラアリア集」を発行したいと思うようになってきていました。

ちょうどその頃、大手レコード会社から直接お電話を頂き、「先生のお声で、これまでの通念を完全に覆すような“日本歌曲集”のCDを収録したいのですが、いかがでしょうか?」というご提案を頂きました。“フルオーケストラでのオペラアリア集”ということで頭がいっぱいであった私は、その大手レコード会社からのご提案を即座に断ってしまいました。今、考えますと、もったいないことをした・・・とも思えます。なお、その時にお伺いしてみたのですが、「私の希望する“フルオーケストラでのオペラアリア集”は、大手レコード会社であっても、費用的にとっても無理である」とのことでした。

東京方面にお住いの私のファンの方が、大手レコード会社を定年退職なさったばかりの日本最高の録音技師と録音ディレクター、ならびに、録音プロデューサーにお声掛けをくださり、私が東京に出張していた際の夜に、5名が集まって、私の“フルオーケストラでのオペラアリア集”の計画を如何に遂行するかということについて相談をしていました。それだけのメンバーが集まっても、フルオーケストラでのオペラアリア集のCD収録というのは、なかなか困難なことであり、暗礁に乗り上げてしまい、話が進まなくなった夜の10時頃に、私が思いきって、松本美和子先生にお電話を致しましたところ、「すぐにいらっしやい!」とのことで、5人で、松本先生の御宅に伺い、ことの次第をお話し申し上げましたところ、その場で、すぐにイタリアにお電話をしてくださり、高名なオペラプロデューサーのジャンフランコ・パスティネ先生にご相談くださいました。

我々ではどうしようもなかったことが、どんどんお話しが進み、数日のうちに、パスティネ先生が、イタリア人指揮者のジョヴァンニ・ディ・ステファノ氏とソフィア国立歌劇場管弦楽団にご依頼をしてくださり、2004年のゴールデンウィークに収録をすることになりました。日本最高の録音技師の方が、必要な録音機器等も携えた上で、ソフィアに行ってください、ソフィアで最高の「ブルガリアホール」を借りきって録音を行うということまで決まりました。当時、現役の医学部教授であった私は、どうしても、春のゴールデンウィークに全てを完了させねばならない、という大きな制約がありました。ゴールデンウィークの始まりに合わせてすぐに、家内も一緒にイタリアに飛び、イタリア人指揮者のステファノ氏とピアノを使つての打ち合わせを行い、その後、ステファノ氏、松本先生、パスティネ先生と上記の5名に家内を加えた9名でソフィアに入り、3時間、3時間、6時間、3時間と4日間連続で歌い続け、計15時間で15曲(1時間で1曲のペース)の収録をするという“離れ業”で録音を致しました。1時間に1曲録音ということの実際は、まず、初対面同士の指揮者とオーケストラだけで音合わせを行い、次いで「小さな声で歌ってみて」と、曲想も含めた打ち合わせと試し歌いを行い、そして、「はい、本番テイク」ということで、本番収録となり、ほぼ“一発録り”というペースで録音が行われてゆきました。オーケストラのメンバーから「あんた喉が強いネ!」というお言葉まで頂きました。松本先生とパスティネ先生もずっと収録に臨んでくださり、松本先生は、そのCDのジャケットの「このアルバムに寄せて」というライナー

ノーツに「四日連続でこれだけの難曲を録音できたテノール歌手はかつて誰もいません。米澤さんはこの驚くほかない離れ業を成し遂げてしまったのです。」とお書きくださっています。松本先生がおっしゃいますには、日本人のテノールで、プロ歌手も含めて、「フルオーケストラでのオペリア集」のCDを出版できているのは、私だけであるとのこと。

以上のような収録でしたので、ヨーロッパ側の関係者への謝礼や必要経費、日本側の関係者への謝礼や渡航費を含む必要経費、等々、全ての費用を、私一人で負担いたしまして、気の遠くなるほどの費用がかかりましたが、幸い、NHKのラジオ深夜便をはじめ、沢山のマスコミにお取り挙げ頂き、「CD/DVDのご案内」のコーナーでもお示ししていますように、ヒットチャートの第1位をたびたび獲得するほど良く売れましたので、CDのリリースから、かなり早い期間で、CD収録に掛かった費用を全て補填することが出来ました。日本人テノール歌手で、フルオーケストラでのオペリア集を発行できていますのは、プロ歌手も含めて、私一人のみであるという「希少価値」も、このCDが良く売れた一因であると考えられます。私に、日本歌曲のCD発行を提案くださいました最大手のレコード会社でも、フルオーケストラのオペリア集を発行できないというのは、収録に掛かる膨大な費用を、J-Popのようなファンが多い分野であれば充填も可能でしょうが、日本では、ファン層もそう多いとはいえないクラシックの分野では、収録に掛かった費用を充填できるほどCDが売れないので、手が出せないというのが“現実”であろうと思われれます。

私のCD「誰も寝てはならぬ / 米澤 傑 テノール・オペリア集」が、ヒットチャートの第1位を獲得するほど売れましたのには、高名な音楽評論家の故・黒田恭一先生のご推薦と応援が大きいことも確かです。CDの収録の4ヶ月ほど前に、東京の紀尾井ホールで開催されたコンサートで、私の歌をお聴きくださいました黒田先生は、私が、東京で松本先生のレッスンを受けた折には、わざわざ、レッスンをお聴きにお越しく下さり、『家庭画報(第47巻第10号、2004年10月1日発行)』の記事で「今、黒田さんが最も注目するオペラ人」ということで2名をお挙げになり、1名は「サイモン・ラトル + ベルリン・フィル」、そして、もう1名が「米澤 傑」でした。その記事では、「マリオ・デル・モナコの声を持つ医学部教授に会う」という題目で、黒田先生と私との対談が掲載されています。

さらに、音楽雑誌の『モーストリー・クラシック』(通巻第91号、2004年10月4日発行)の“巻頭言”「黒恭の感動道場」に、「玄人/素人の壁超えた歌唱に驚き」という記事をご掲載くださったり、『サライ』というような一般雑誌へのCDの写真入りでの紹介記事、そして、なんと、『BURRN!』という“ヘビメタ”の雑誌にまで「オペラを見事にきかせるテノール、しかしてその正体はうたうお医者さん・・・!？」という紹介記事をお書きくださいました。CD「誰も寝てはならぬ / 米澤 傑 テノール・オペリア集」の帯には「天から授かった珠玉の喉を磨きに磨いて、その声を本物のテノールのものにした米澤傑。一級のテノールをきいたときだけに味わえる至福の瞬間! (音楽評論家 黒田恭一)」というご推薦のお言葉を、ジャケットのライナーノーツには「聴け!これがテノールだ!」というタイトルで「テノールのうたいあげる情熱がいかにも純粹で、ひたむきで、熱いかを実感したかったら、米澤傑の声と歌唱に真摯に耳を澄ますに限る。まさにこれがテノールである。」というご推薦のお言葉をお寄せくださいました。

高名な音楽プロデューサーの中野雄先生も、音楽雑誌の「モーストリー・クラシック」(通巻第162号、2010年9月18日発行)の「音楽人間模様」に、「上杉春雄(ピアニスト)と米澤傑(テノール) — 天は二物を与える? 医学と音楽の二足のわらじ —」という記事で、札幌の神経内科医でピアニストの上杉先生と、鹿児島島の病理医でテノールの私を、“日本の医学界には、「東の上杉、西の米

澤」と並び称される、2人の鬼才が活躍している。”という書き始めでご紹介くださっていて、私のCD「米澤傑 テノールコンサート」とCD「誰も寝てはならぬ / 米澤 傑 テノール・オペラアリア集」についても言及くださっています。

さらに、その“続編”として、「モーストリー・クラシック」(通巻第188号、2012年11月20日発行)の「音楽人間模様」に、「再認識しよう ― 脳は決して疲れない 天が二物を与えた上杉春雄と米澤傑の後日談」という記事で、美智子皇后陛下が御臨席あそばされたサントリーホールで開催された「モーツァルト・レクイエム」での私にソリストの模様などを、私の専門の「病理学」での活動と共にお書きくださっています。

そして、2021年9月に発行されました「モーストリー・クラシック」(通巻第294号、2021年発行)に『天は二物を与える・再論 医師・テノール歌手 米澤傑の現在』という記事で、私の「医学研究」について、この上なく判りやすく、かつ正確に記述くださり、私の「音楽への道」につきましても、「声楽との出会い」から、名指揮者の方々との共演や「トゥーランドット」に至るまでを躍動的にお書きくださり、イタリアデビューをしていたら「本場で活躍する稀有な邦人テノール」が誕生していたかも知れないが、「米澤は大学教授選挙への道を選択、日本の医学界は貴重な人材を失わなくて済んだ。」とおまとめくださっています。この記事の中で、CD「誰も寝てはならぬ / 米澤 傑 テノール・オペラアリア集」は「タワーレコードのJ-CLASSICALウィークリーチャートで計4回第1位に輝いた名盤である。」とお述べくださっています。

2019年12月、CD「米澤 傑 テノール ライブ ～ オペラアリア・カンツォーネからミュージカル・映画音楽まで～」をリリースいたしました。ライブ録音ですので、私の「一発勝負の歌」というスリルとともに、コンサート会場での臨場感(新型コロナウイルス感染症拡大の前に録音されていますので、一曲ごとに、客席からの“ブラボーや歓声の嵐”をお聴きいただけます)を味わっていただけます。中野雄先生は、このCDの帯に「誰も聴いたことのない歌声! 世紀のテノール 米澤 傑 白熱のライブ(音楽プロデューサー 中野雄)」というご推薦のお言葉をくださいました。

(2021年8月21日記)